

平成28年度 第1回滋賀県公立大学法人評価委員会開催結果（概要）

日 時 平成28年6月23日（木）
13時55分～16時00分
場 所 滋賀県立大学管理棟3階 教授会室

【出席委員】 位藤委員（委員長）、北野委員、古川委員、前野委員

【事務局】 久保田私学・大学振興課長、他関係職員

【県立大学】 大田理事長（学長）、堺井副理事長、廣川理事、濱崎理事、倉茂理事
井手学部長、山根学部長（代理 徳満教授）、面矢学部長、甘佐学部長
木村事務局次長、他関係職員

1. 開会

- 久保田私学・大学振興課長あいさつ
- 委員、大学および事務局の出席者紹介
- 委員長の選任
 - ・委員の互選により、位藤委員が選任された。
- 委員長代理の指名
 - ・位藤委員長より、北野委員が指名された。
- 委員会の進め方について
 - ・委員会の進め方について、事務局から説明

2. 滋賀県立大学の概要説明

- 大田理事長から滋賀県立大学の概要説明

3. 学内調査（視察）

- 授業見学

4. 質疑応答

（委員長）皆様、どうもお疲れ様でした。これから約30分間は、質疑・意見交換を行いたいと思います。学内を御覧いただきまして、御感想や御意見がお待ちしておりますので、自由に御発言いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

（委員）先ほど、交換留学の話を紹介していただきましたが、単位の認定状況について、どの程度の学生がどれぐらいの単位を認定されているのか、教えてください。

（大学）国際コミュニケーション学科の場合には、1年間留学したとしても、4年間で卒業できます。

留学している間に、現地のクラスに入って 20 数単位ぐらい取れています。

(大学) 留学 1 年の場合は、現地で取った単位をもう一度こちらでチェックし、国際コミュニケーション学科の場合は、30 単位までは認められることになっています。30 単位を 1 年で取ってくれば、デメリットはないということになります。

(大学) 一方、他の学科の学生が長期留学（1 年間）に行こうとすると、とてもそれだけの単位が取れませんので、1 年間は留年ということになります。願いによってその多くは、授業料 1 年分を免除していますが、そのような学生はそんなに多くいるわけではありません。

一方、海外研修では、例えばアメリカのレイクスペリオル州立大学では、異文化理解 A ということで 2 単位、今年の秋に、フィリピンで国際環境マネジメントというセミナーをやり、これも 2 単位となっており、そちらの方の単位数は多くありません。

(委員) 受入れは、国際コミュニケーション学科以外でも受け入れているのですか。

(大学) 向こうから来た学生が、それぞれ彼らが何を勉強したいか、というところで受けています。

(委員) 最初に見せていただいた C L S プログラムは、今年は日本での開催は県立大学ということですが、毎年あるわけではないのですか。

(大学) 昨年 1 度行い国務省がチェックし、これであれば大丈夫、ということで、今年、来年、再来年の 3 年間やっていただく、ということになっており、3 年間は県立大学以外ではやらない、ということになります。

8 週間のプログラムの 4 週間はホームステイで、ホームステイ先を見つけることが大変です。大学が国際化するというのは、周囲も相当程度国際化することを前提にしていると言えます。

(委員) 県立大学の学生とのインタラクションもやられるのですか。

(大学) C L S の学生は、期間中、日本語以外話してはいけません。それぞれの学生に国際コミュニケーション学科の学生がパートナーとしてついており、学生は英語がしゃべりたくて仕方がないのですが、ダメだということです。

同じく 8 週間の語学研修が同時に行われており、これは交換留学で日本に来たい学生が夏休みの間にあらかじめ日本語の勉強をするもので、こちらは日本語と英語が半々です。

(委員) 自分たちが考えたり工夫することを引き出せるような取組をされていると感じました。一方的に講義して質疑応答であれば楽だと思いますが、大変な努力と時間をかけていらっしゃると感じました。そうになると、単位や進級をどうするかというところで評価が必要になるとは思います。評価システムはあるのでしょうか。

(大学) レポートについては、一定の課題は課し、記述式の場合はキーワードを設定していますので、

そのキーワードがきちんと押さえられているか、全体的な文章のロジックが押さえられているかを見ています。いろいろなレポートは出てきますが、全体的には評価そのものが難しいとは思っていません。

(大学) 工学部では、最終的には技術に関する考え方の基礎になりますので、ものの考え方のプロセスがきちんと考えられているレポートであればきちんと評価します。

さらには、失敗した事例においても、なぜうまくいかなかったのか考察を深めて理解できていれば十分であるとする評価基準にはなっています。

(大学) 人間文化学部でも、各科目の評価は細かな採点基準を作っています。単に期末試験だけではなく、何種類かの評価基準を決めてそれぞれ点をつけていくという方式が多いです。

一番苦しいのが卒業論文で、これについての評価は相当難しい部分があります。大体、学科の教員の全体の会議で評価していますが、もう一回出し直すように、ということは、他の大学と同じように最後まで苦しんでいます。

(大学) 看護学部は、卒業時に国家試験を受けるということもあり、到達目標が明確ですので、それに応じた評価基準を各教科で設けています。

実習等のレポートについては、複数の教員で見ることもあり、できるだけ担当する教員が共通した基準で評価できるように、ということで、比較的細かい評価基準を作り共有するようにしています。

(大学) 県立大学ではどの学部でも、必ずこういう形で学生に評価の基準を示しなさい、という約束事があります。それぞれの教科でどういう力を養うかということと到達目標、それぞれの到達目標に対して、どのような手段で測定するかが書かれています。これにより、学生には自分が今やっていることで全体の何%が評価されるのかが明示されていることになります。さらに、ルーブリックを作ることを奨励しています。ルーブリックとは、簡単に言えば成績評価基準ですが、成績評価の仕方を表形式で示したものです。学生もどういうところをチェックされるのか、どれぐらいの到達段階で合格させてもらえないのか、というのが分かります。

(大学) シラバスにもきちんと授業の中身が記述してあります。シラバスやルーブリック、評価基準がしっかりしていることは国際通用性につながります。

(委員) 実験を取る学生が減っている、ということでした。単位が半分ということも影響していると思いますが、それ以上に、実験に対する関心、ちょっと面白いからやろうという感覚が失われ手間がどれくらいかかるかというのが尺度になっていて、実験の大事さとか後々自然を見る目を養い、自分勝手にしても自然は従ってくれないということを学ぶ、という、サイエンスにおいて非常に重要なことを多くの学生がスルーしてしまうというのは、何とかしなければと思っていますが、どうでしょうか。

(大学) 本学の場合は、実験科目は全て必修で配当していますので、必ず受けます。ただし、主体性

という観点からすると、やはり、最近の学生はそこまでいきません。どんな興味を持って、興味を持ったことについてどれだけ自分で図書館に行って調べてくるか、工学部ですと調べたことを手書きで書かせています。手書きで書かせることによって図書館に少しでも足を運ばせるということで、徐々にですけど涵養していこうとしています。

もうひとつは、機械システム工学科の中にモノづくりラボというものを作り、3Dプリンターを導入し、プログラミングができればものづくりができるということで、少しずつですけどものづくりに対する興味をもってもらうことも進めている段階です。

(大学) 環境科学部には環境科学に関連する実験、実習科目は、他にも非常に多くあります。その中で、物理、化学、生物、地学の四科目基礎実験はまさに基礎実験で、教職指定科目になっていることから、学生の中でも教員免許を取りたい学生が履修する性格が強い科目です。カリキュラム上工夫していく面はあるかと思えます。

もう一つは、あの科目はかなり細かく評価基準が配られており、学生たちからすると負担感があるのかな、という気がします。授業をしている我々からすると乗り越えてほしいところですが。

(委員) 今の学生の資質からいうと、まず何かしら成功体験をさせて、面白いな、と思わせるフェーズがあるのかなと、それから次に誤差の話とかいろいろなことにふっていくべきなのかな、と思います。レポートの書き方も本来レポートを書かないといけないですが、あまり作法が優先してしまうと面白味がなくなってしまうのかな、という印象もあります。

(委員) 我々の学校でも、ポリシーやナンバリング、カリキュラムツリーなどを追いかける形でやっていますが、県立大学ではどういうことを重点的にやっていますか。

(大学) アドミッション・ポリシー (AP)、ディプロマ・ポリシー (DP)、カリキュラム・ポリシー (CP) のうち、県立大学で最初にできていたのが AP ですが、昔ながらの書き方をしているところはかなりあります。

そこで、全学科で AP を全部書き直しし、要求している力をどの種別の入学試験で測定するかまで明示するものを書き直しているところです。DP と CP は 6 年ぐらい前に研修会を行い、そこで書き方等を学んでできたので、最初からかなり質がいいものができています。

また、平成 33 年度の入試大改革に沿って入学試験のやり方も大きく見直さなければならないので、来週から改革専門委員会が動き出す段階です。

(委員長) まだまだあろうかと思いますが、時間が迫ってまいりましたので、本日はこの辺で終わらせていただきたいと思います。次回以降の委員会でも質疑の時間を予定していますので、その際にお願ひ致します。

5. 閉会

○事務局から第 2 回委員会についての連絡